

## 主体的に学び、豊かな感性を育む書道教育 ―部活動での臨書指導実践を通して―

Calligraphic Education For Independent Studying And Active Sensitivity

— through by the calligraphic hond-copy activities —

服部 一啓

Kazutaka Hattori

(美術教育講座)

(平成十八年十月二日受理)

### はじめに

筆者が愛媛県立三島高等学校在職中に自身で取り組んでいた「部活動での臨書指導実践を対象とした書道教育について」を継続する機会を得た。学校教育における部活動の在り方について、従来の活動内容・方法の改善と、新たな活動の可能性と発展が検討されている。「主体的に学ぶ」とは、活動者たる生徒の主体性を指す。書道は芸術科として高等学校において初めて設置される科目であり、指導者と生徒との知識や技能に差異が認められる場合が多い。指導者は勢い一方的に教えることが多い、生徒の側から見れば、与えられた課題をこなしていくという受け身となってしまうことがあった。こうしたあり方は、「生きる力」の育成を求めた教育の流れに逆行するだけでなく、生徒自身の書に対する

活動意欲をもそぐ結果になる。そこで、新教育観に即し「書を通して学ぶ生徒の支援をする」という転換を図り、これが「主体的に学ぶ」とする理由である。指導者はあくまでも「教える」ことを放棄するのではなく、知識や技能の伝達者の役割を含む効果的な「学びの場」を作り出し、有為な活動の展開を演出的な役割へとその主軸を移すものと考えたい。

「豊かな感性を育む」とは、新学習指導要領の書道の目標にある文言に呼応する。「感性」とは外界からの刺激がある印象として心に刻み込む働き、能力と捉えられる。書の活動を通して鑑賞や表現する過程での働き、能力を豊かにし、高めていきたいと考える。「感性を豊かにする」ことは芸術活動にとって不可欠なことであるが、書を主体的に学ぶことによってより大きな成果を期待したい。以上を踏まえ、今後益々重

要な課題の一つとなり得る大学と教育現場との連携協力である研究者の実践を取り上げ、その成果と課題について考察していきたい。

## 第一章 臨書指導の現状と課題

書を学ぶ者にとって「臨書」とは最大の学書方法といえよう。学習指導要領上での書道教育における臨書指導は、

「表現」領域・「鑑賞」領域の相互を伸ばし、感性を高め、書を愛好する心情を養い、書の文化と伝統を尊重する態度を育てる。

ことを目標としている。しかしながら教科書、資料集に掲載されている日本・中国の古典解説に加え、旧態依然とした「習うこと」を中心とした、技法解説に偏った指導が体勢を占める。臨書の必要性は常識のように思われているが、「なぜ高校生に臨書が必要であるのか？」ということと考えた時、私自身、古典を「どう習い、どう書かせるのか」という追求に終始していた感が強い。つまり、臨書の意義を探索せず、知識としての臨書のシステムを、見方を生徒たちに教示していた。そのような根を持たせない状態から生まれる生徒作品に、力は満ちてこない。

書の分野にとって、近年のIT化によるワープロの普及は、大人も子供も、文字についての関心や考えることの衰退、活字離れの傾向を持たらし、書くことよりもキーを打つことに向かっている。しかしその反面、メディアにおいては筆文字ブームといわれるような風潮が認められ、デザインとしての書の表現力が求められているようになっていく。こうした中、学校教育では従来の書写書道的な「習う」視点での授業が、実際の現場における主流に変わっていない。加えて、短絡的な判断から学校教育には専門的な技術訓練は不要とみなす傾向を導き、また進路指導の優位

性や学習時間の確保からも芸術の時間数の削減、書道を専門とする教員の減少もやむなしとされているように窺える。情操教育の重要性が説かれる一方、まことに残念な現状といわざるをえない。しかし、書道教育の必要性を考えると、芸術的視点での最も要となる「表現」「鑑賞」という、芸術的体験学習を見直すべき段階にあるといえる。つまり、書を学ぶ者の最大の学書法である「臨書」指導の再検討である。将来を担う生徒たちに表現・鑑賞を主とした臨書体験学習の深さ、楽しさを味わってもらい、その指導にあたる教員側も一緒に十分な理解を示す活動こそ、書の文化そのものというべき「古典」普遍的な美を有す先人たちの遺産から積極的に学び行うべきことではなからうかと考える。そしてこの実践では、個性や想像力豊かな生徒たちの育成に励むことが重点課題となるだろう。ここに学校教育と書の必要性が改めて認められる。

## 第二章 愛媛県立三島高等学校での試み

### 一、研究の目標と仮説

臨書指導の実践を行うことで、「書」を見つめ、お互いに高めあい、新たな活動の展開を願った。さまざまな実践課題、方法、問い掛け、問題意識から「感じる」「考える」ことの重要さを追求させることで、自ら主体的に創造する喜びへとつながるのではないか。部活動における継続的な実践から、以前に行った内容との関連性「古典に学ぶ」ことの意義を再認識する必要があった。主体的に活動するためには、書の深さ、楽しさを知る体験が必要である。中国北魏時代の楷書である龍門造像記をテーマに設定し、各自が造像記の中から古典を一つ選定し全臨作品にするという、選択制でかつ作品制作活動重視の内容を課した。

## (一) 古典に学ぶ

- ・多様な古典に触れ、新しい表現世界に関心を持たせる。
- ・古典の鑑賞法（印象・特徴・背景・人物・時代）について考えさせる。

・古典の技法を分析的に学び、文字造形・リズム・精神など先人の表した美の追体験を行い、さまざまな書的美を味わわせる。

・古典は美の原点、宝庫である。習うことが目的ではなく、「自分を育てる糧」である立場を理解させるように導いていく。

## (二) 表現指導

・文字を書くという行為を表現する行為へと高めていく。

・自己の思いを託すことのできる素材を見つけ、感動の表現を目指す。

・書に取り組むことで、自分の個性や特性を確認し、再発見させる。

・芸術文化と生活との関わり、書の文化と伝統を尊重し、さらに新しい可能性を模索させ創造の表現を目指す。

## 二、研究の内容

## (一) 研究日程および実施内容

## ① 春期錬成会 二〇〇六年四月一日～二日

錬成テーマ「古典臨書に学ぶ」

- ・龍門造像記（北魏）
- ・禮器碑（後漢）
- ・薦季直表（魏）
- ・十七帖（東晋）
- ・鄭義下碑（北魏）
- ・枯樹賦（唐）
- ・建中告身帖（唐）
- ・灌頂記（平安）

## ② 夏期錬成会 二〇〇六年八月二十五日～二十七日

錬成テーマ「龍門造像記臨書研究」

## ア 龍門造像記の講義

イ〈実践1〉牛橛造像記を使用しての試み

ウ〈実践2〉造像記比較分析表の作成

エ〈実践3〉四種類の造像記の比較検討及び半切臨書制作

オ〈実践4〉造像記大字臨書制作

カ〈実践5〉全臨貫徹（龍門二十品から各自一品選択し全臨作品制作を行う。）

キ〈実践6〉作品鑑賞会

## (二) 夏期錬成会についての指導実践

二〇〇六年四月に実施した春期錬成会より打ち合わせを重ね、八月二十五日～二十七日の三日間、同校書道教室及び松柏公民館で出前講義と連携協力の形式で夏期錬成会を実施することとなった。今回、研究者からの提案は、

・高校にて指導を行う前に、春季錬成会「古典臨書に学ぶ」を再検討すること。自主的に龍門造像記を臨書しておくこと。

・比較分析表の作成を通して龍門造像記を鑑賞することで、視覚的印象を言語化すること。

・分析・鑑賞による印象を個人的表現とその確認（全臨作品制作）にまで昇華させること。

の以上三つを試みた。短期間の取り組みにおいて龍門造像記二十品を臨書指導の対象に取り上げた理由は、次の通りである。

① 全部員が既習の古典であり、全員で取り組み易い。

② 生命力が漲り一貫した力強い筆力と気持ちを必要とする。

③ 他の時代や同時代の楷書との比較、龍門二十品の中の文字の比較・

分析が行い易い。

④造形、用筆、性格（精神）が理解し易く、知識と感性の両面への訴えが強い。

また、一見同じように写る文字造形は「造像記風」と一括りにされ易いが、実は造像記の書風は各品毎に趣が異なり、特徴もさまざまである。造像記の比較分析表を作成する手順を踏めば、自分なりの観点が生まれ、深く比較検討するのではないかと考えた。

以下実践例と考察を報告する。

対象 愛媛県立三島高等学校 書道部員十七名

題材 「龍門造像記臨書研究」

・一日目 二〇〇六年八月二十五日（金） 九時～二十四時

〈導入〉講師（服部）の講義

①龍門造像記は龍門石窟にある三六八九点の造像記であること、現在の河南省洛陽南郊の伴水にある石窟群や古陽洞内部の風景をビデオで示し、制作の背景に触れる。

②龍門石窟が造営された北魏時代の前後における書体書風の変遷概略を示し、造像記の特徴を視覚的に認知させる。

曹全碑・広武將軍碑・鄭義下碑・李公文書・蘭亭序・九成宮醴泉銘を示す。

③龍門二十品を示し、その書風の広がりを見て取ることで表現の自由さを認知させる。

④龍門造像記の種別について、中国清朝中期の書論や碑学派の勃興などの史実を示し、書の歴史的作品に関する基礎的な見方を理解させる。

〈実践1〉牛橛造像記を使用しての試み

①牛橛造像記「永絶因趣一切衆生咸蒙斯福」図版を用いる。（図1）図版を見ながら、文字が白の場合と黒の場合で、表情が異なることを認識する。同時に真跡と拓本の違いについて理解を促す役割を果たす。視覚的効果の違いについて思考、考察することに眼目を置く。

②トレーシングペーパーを用いる。

図版の複写。まず一枚は図版の上にトレーシングペーパーを被せ、透かして写す方法、もう一枚は図版を横（用意したペーパーの左手）に置いて、それを見ながら別紙に形を模写する方法をとる。筆画の精密さ（角度や線の太さ）の特徴、線質や字形、字の大きさ等により、どのような違いが認められるかを判断する。

③鉛筆で臨書を半紙に行う。

文字の骨格や組み立てを理解し、字間や行など全体構成の変化と調和を図り、臨書作品制作における設計図の役割りを認識する。

④半切二行書きに臨書作品制作と鑑賞を行う。

〈小まとめ〉

模写でも、書いた人の癖や感覚が素直に現れ出ることを確認。これは書の表現性における優劣ではなく、個性であることを指摘する。出来上がり状況を見ながら、一人ひとり違った個性を持っていることを確認し合い、古典の持つ表現力を歴史的営みの工程として位置づける。なお、④の作業では墨の濃度の自由さ、大小筆の自由選択により、手順と出来上がりにおいて個々の差異が明確に現れた。全員で同じ工程を進める中で、他者との違いを気づき、技術のみならず、見方や道具によっても出来上がりが異なることに、自発的に質問を投げ掛け合う。指導者側から



図1 牛轂造像記



図2 比較分析表の作成

楊大眼	魏靈藏	北海王	始平公	牛橛
  	  		  	
	賀蘭汗	比丘惠感	孫秋生	鄭長猷
		 	 	   

図3 比較分析表「像」

は、どれも正しい方法で制作されたことを強調し、違いが確認できるところこそ大事であると明言することにより、ここまでの実践が個々人の中で自信となる。「違い」こそが、発揮された個性の一要因であるという視点に気づかせることを意図とする。この〈実践1〉牛轡造像記を使用している試みをどれだけ丁寧に行い、個々人に対象となる古典をしつかり見極めさせることは、書の構造を見極め、臨書に挑む鑑賞の姿勢を教示することであり、後は表現、即ち制作活動に委ねられる。この過程こそ主体性を促すための必須条件といえるのではなからうか。

#### 〈実践2〉造像記比較分析表の作成(図2・図3)

- ① 龍門二十品から「造」「像」「為」「區」「一」「太(大)」「弥」「勒」「年」「月」「日」「父」「母」「子」「願」などの使用頻度の高い文字二十四字を各造像記漏れなく全て抽出する作業を行う。
- ② 「ハ」の「宗」「容」「安」「窟」「空」は一つにまとめた。
- ③ 切り取った各造像記の文字を専用シートに文字毎に貼付する。
- ④ 作成した造像記比較分析表を印刷し、配布する。

・二日目 二〇〇六年八月二十六(土) 七時〜二十四時

#### 〈実践3〉四種類の造像記の比較検討及び半切作品制作

- ① 龍門二十品の中から、それぞれに個性が強く、字形の特徴もより顕著に見られる「孫秋生造像記」「鄭長猷造像記」「比丘惠感造像記」「賀蘭汗造像記」の四種類を比較検討する。
- ② 同一文字比較を造像記比較分析表を使用してより詳細に検討する。
- ③ 実践1での手法を用い、鉛筆による臨書を行う。
- ④ 半切二行書きに臨書作品制作を行う。

四種類の造像記が四様の書風であることの確認や、線の表情の変化に注

目させ、四種各々の特徴を個々人ノートに筆記するよう指示する。文字の造形的特徴のポイントや線の表情をより実感させることで、どのような個性の違いであるのか具体化する思考体験となる。制作にあたってはそれぞれの特徴の違いを素直に感じた通りに、そして明確に表現できるように心がけることを注意させた。ここでは、四種類の「違う」性情を書き分けることを自覚しながら臨書制作を体験する。臨書という行為が単なる技法的訓練としてではなく、表現として個性が発揮される造形表現の場であることを理解する機会がもたせらるることとなる。

#### 〈実践4〉造像記大字臨書制作

- ① 半紙に一字書き(縦・横)、半切1/2に一字、二字書きの臨書を行う。

- ② 全紙に二字書きの臨書制作を行う。

文字の構造の原理や運筆・用筆の方法をより明確に体得するため、半紙に一字書きや、全紙に二字書きの臨書法がきわめて効果的である。文字の周辺の余白と文字との関わりがより鮮明になり、空間把握という点においては絶大の力を発揮する。全紙に二字書という大字臨書は従来の臨書法からみれば、やや粗雑に思われがちであるが、小品と大作では紙面の大きさだけでなく、用いる筆もが異なり、含墨量や鋒の弾力など筆の性能が違うわけで、揮毫の際の姿勢、身体の動きまでも違ってくる。大字揮毫の運筆や空間把握を学ぶには、大字臨書法は欠くことができない。ことに現代の書ともいえる、造形美に訴え感興の高まりを表出し易い少数数書の創作をめざすには、臨書法にも柔軟に臨機応変な工夫を取り入れられることが大切である。大字臨書法の目安として、気力の充実を期して遅速・緩急を明確にし、運筆のリズムに主力を注ぐことも一つの方法である。

〈実践5〉全臨完徹（龍門二十品から各自一品選択し全臨作品制作を行う。）

- ①全臨の対象とする造像記を選定する。
- ②実践1と同様の手法を用い、鉛筆による臨書を行う。
- ③実践4と同様の手法を用い、半紙に一字書き、半切1/2に一字、二字書きの臨書を行い、大字臨書法の工夫を試みる。
- ④臨書作品制作に際し、北魏時代に思いを馳せ情感を盛り込み、自分らしい個性溢れる作品制作を心掛け取り組む。

・三日目 二〇〇六年八月二十七日（日）七時～十六時

実践5を昨晚に引き続き遂行する。現在進めている実践のすべてが、自分たちを鍛え、豊かな人格形成につながっていくことを意識させる。書表現は平面として認知されているが、古典を生み出した先人たちはそこに思想や精神を盛り込み、それが奥行きとなって現代に生きる我々に訴え、書の抽象的で味わい深い連想（想像力の発揮）を生み出す由縁である。そうした本物を学び表現する素晴らしさ、文化史上の一端を担う心持ちを育てることの意義についても臨書は内包し、考えさせてくれる。

#### 〈実践6〉作品鑑賞会

作品鑑賞において、自分と全体との差異を確認することとなり、鑑賞の中で、まずはしっかりと観ること（観察、鑑賞）の大切さを強調する。出来上がりは個々に差異があっても構わない、個人の見え方における違いであることを説明し、鑑賞することにも個人差が必ずあることを理解するよう促す、何よりもまず、観る、作る、考えるという自主的な体験の重要性和作品制作をやり遂げたことの達成感を大きく取り上げる方向性である。

#### 龍門二十品臨書リスト

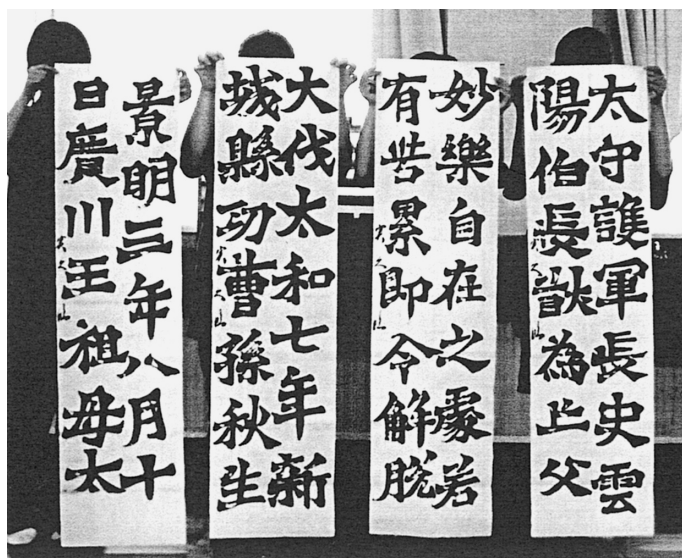
牛橛造像記	二名
一弗造像記	一名
始平公造像記	一名
北海王元詳造像記	一名
魏靈藏造像記	一名
楊大眼造像記	二名
鄭長猷造像記	一名
比丘道匠造像記	一名
孫秋生造像記	三名
比丘惠感造像記	一名
賀蘭汗造像記	二名
馬振拜造像記	一名

龍門造像記二十品に対して研究対象者は十七名であった。十二品が選択されたが孫秋生造像記が三名と最も多い。次いで牛橛造像記、賀蘭汗造像記が二名ずつの選択となり、八品が各一名ずつの選択であり個性が如実に示された結果となった。



妃侯為亡  
夫侍中使

臨 賀蘭汗造像記 (138 × 70)



四種造像記

司馬解伯達造  
弥勒像一軀願皇  
道赫寧九某

臨 解伯達造像記 (138 × 70)

現世眷屬萬福雲歸殊  
輪疊駕元世父母及弟  
子等來身神騰

臨 孫秋生造像記 (180 × 52)

劉雲

臨 孫秋生造像記 (138 × 70)

夫靈跡誕遊必表光  
大之迹玄功既敷  
樹希世之作自雙林  
改照大千懷綴嘆之  
悲慧日潛暉吟生衛  
道慕之應是應真悼  
三乘之靡憑遂以刊  
像爰暨下代茲容廓  
作鉅鐫觀靈藏河東  
薛法紹二人寺東  
光東照之資關聖  
翊頭之益敢輒磨  
財造石像一區凡  
衆形同不備列額  
祚興述萬方朝賞  
藏等樹三槐於孤  
秀九蘇於華苑芳  
手繁瑞據獨茂合  
策龍指添并葉命  
之後飛蓬十聖神  
六通智周三達曠  
雨生元身眷屬捨  
鄣則鵬翥龍花悟  
生則鳳昇道樹五  
群生咸同斯慶陸  
縣功曹魏靈藏

全臨 魏靈藏造像記 (161×455)

夫靈藏則攀宗靡  
尋容像不陳則崇  
之必真上齡遺形  
敷于下葉暨于大  
代茲功厥作比丘  
慧成影濯玄流逢  
昌運率渴誠心為  
國造石窟寺象答  
皇恩有資來業父  
使持節光大夫洛  
州刺史始平公龜  
放仰以擢躬匪在  
震慧燭則大千斯  
元世師父母道場  
鸞騰若悟洛人三  
遊亡父造石像一  
區亡父神飛三周  
十地玄照則萬斯  
槐秀九雲敷五有  
群生咸同斯願太  
和廿二年九月十  
四日訖朱義章書  
孟達文

全臨 始平公造像記 (173×543)

色主仇池楊大眼為夫靈光  
弗曜大千懷永夜之蹤蓮業  
生塵道之懺是以如來應群  
緣以顯迹爰像遂著降及王  
茲功厥作輔國將軍直閣將  
梁州大中安戎縣開國子仇

全臨 楊大眼造像記 (一部) (33×24)

## 第三章 研究の成果と課題

三島高校での実践において、生徒たち自らが主体的に龍門造像記に取り組むことを狙いとしたため、参考手本は与えていない。最初の実践Ⅰの段階で牛欄造像記に取り組ませたのは、造像記を学ぶ基準としてこの題記は品格高く、しかも勁拔であり、起筆、収筆ともにはっきりし、龍門造像記の先駆をなした代表作であるからにはかならない。造像記比較分析表の作成と活用は、生徒の個性に合う造像記の選定、各造像記ごとの特徴を浮き出し、文字の形態や筆法を分析するというただ書くという行為では得られない、臨書研究の大切な作業である。四種類の造像記の比較検討や半切での制作研究を経て、錬成会では全紙による制作に移行した。全紙に三〇六行から二行八文字、また全紙二字書きなどの大字による臨書法にも取り組ませた。大字ならではの瞬発性、迫力を求め、大筆を用い、運動の大きさ、リズムと呼吸、潤渇、遅速、文字の組み立てなどを極端に表出することができた。

造像記比較分析表の作成や大字少字数による臨書制作は、古典学習の一つの方法を学ぶに有効であった。これまでとは違う新鮮な感動を覚えたようであり、また確実に鑑賞や表現能力の幅が広がることになった。龍門造像記に深く親しみ学んだことがきっかけで、同時代の墓誌銘や龍門五十品を調べ比丘法僧釈迦造像記に魅力を感じ、取り組む者があらわれた。全員に全臨を課したことにより、書き始めから終わりまで、文字と文字とを書き抜く力と一貫した強い気持ちを必要とする作品制作が行えた。

臨書の仕方などを知識として得ることは容易である。しかし、既知の臨書価値を習得していくというやり方ではなく、練習量に裏打ちされた

独自に「わかって」と体験することこそ望まれる。研究の目標にあげた具体的な成果を記すと

・「この古典から何を学ぶのか」が明確にされ、多くの表現方法を身につけた。

・鑑賞能力を高めることにより、創造性のある広い視野で書を見つめ、意識がさらに深まった。

・造像記の書を分析的に学習させることにより、徹底させる力を養った。ものを作ることの深さ、楽しさを味わい、創作することで豊かな感性を磨き、創意工夫の力を培い、「自ら生きる力」の習得につながった。

・書を学ぶ姿勢が書以外の面でもよりよい結果を生ずるように指導せねばならない。書を通して個をみつめ、物事の考え方、生き方を考えさせることに書を学ぶ意義があると思われる。

今回の指導実践から、以前にも増して書の美には他の芸術と同様にさまざまな美しさの質が存在することを認識した。また、筆のはたらかしと心の躍動が連鎖的に絡み合い、いきいきと自己表現となっていく一つの作品を形成していくことを学んだ。

私は芸術的書表現の原点として「南北朝時代の書」を捉えている。中でも「龍門造像記」は筆力（リズムを含めた）を養い、人間の感情表現を汲み取り養うことのできる最たるものと思う。また、若いエネルギーを爆発、体当たりさせ、それを受け止めさらに発展させる力のある古典といえよう。臨書指導、創作指導を問わず、字形のとり方や構成の仕方のみに終始する指導に甘んじるのではなく、表現の根本に関わることや、書こうとする内面的感動こそを啓発していかねばならない。「創造の喜び」をたえず追い求め、もっと純粹に謙虚に、そして積極的に「書」そのものに迫る、その内面の真に迫るという態度こそ、鑑賞や臨書の本質

であり、今後の課題といえよう。

### 主要参考文献

- 『高等学校学習指導要領』財務省印刷局、一九九九年
- 『高等学校学習指導要領解説 芸術編』教育芸術社、一九九九年
- 『出光美術館研究紀要』八号 出光美術館、二〇〇二年
- 『第44回全日本書写書道教育研究会 東京大会要項』二〇〇三年
- 『書写書道教育研究』十八号 全国大学書写書道教育学会、二〇〇四年

### 注

- 1 拙稿「豊かな感性を育む体験的臨書」『第19回四国高等学校書道教育研究会愛媛大会要項』二〇〇二年



鍊成会風景

永平四年十月  
三比丘法僧造  
釋加像一區

臨 比丘法僧造像記 (138×70)

孫秋生造像記

臨 孫秋生造像記 (138×70)